

山田肖子著『国際協力と学校 —アフリカにおけるまなびの現場—』

(創成社新書国際協力シリーズ(西川芳昭編)、創成社、2009年11月20日刊、230ページ)

黒田 一雄
早稲田大学

本書は、日本の途上国教育開発研究・国際教育協力研究における若きリーダーである著者が「なぜ国際協力をするのか」「何のための教育なのか」について、これまでの、特にアフリカにおける豊かな実務経験と研究活動を基として、真剣に考察・思索し、論じた、教育開発を学ぶ学生諸氏にとって、待望の一書である。

著者は問う。「私が関わっているこの『開発』というものの正体」は何なのか。「ほとんどの子どもが学校に行っていなかった村で、10年ぐらいの間にほとんどの子が学校に行く状態になるということは、社会的に何を」意味するのか。「社会に根ざした学び、人々が必要なことを身につける過程とは」何なのか、と。そして、そのどの問いもが、Education for All、ミレニアム開発目標の国際的政策潮流の中で、途上国における教育開発の現場・フィールドに携わってきた実務者や研究者が、共通して抱く課題、自問自答を繰り返してきた問いかけであると思う。

著者は、こうした問いに答えるために、第一章で、近代化論、従属論、世界システム論といった途上国を取り巻く国際状況に関する理論的視座を整理したうえで、第二次世界大戦以降の教育開発・国際教育協力の世界的潮流を概観している。いわば、従来からの教育開発論の枠組みの中で、この分野の研究者としての反芻作業を行っている。

それはそれで有意義なものであるが、この本の真骨頂は、第二章で、著者が教育学の学説史をひも解くことで、「何のための教育なのか」「教育とは何か」を明らかにしながら、途上国、特にアフリカのコンテクストで、その意味を問いなおす作業を行っていることである。著者は言う。「児童中心主義であれ何であれ、手法をその背景になる

思想や、それが生まれた社会的、時代的背景から切り離すとき、その教育は、そしてそこで伝えられる知識は、社会的妥当性(レバンス)を欠く危険がある」と。だからこそ、「学校を自明視せず」、学校を問い直し、学ぶことの意味を今一度考えてみよう、と。この章で、著者は、西洋・日本の教育史・教育学史・教育思想史を自由に闊歩・横断し、様々な興味深い論考を重ねている。そして、「近年の教育協力の動向の背景にあった、教育を基本的人権とみなし、公教育の義務化、無償化を進める発想の根源は19世紀ヨーロッパにある」と断じ、一方で「途上国のことを理解するために、まず自分の国である日本の教育思想史を知ろうとして、期せずしてヨーロッパの思想史を学んでしまうときの戸惑い」を告白している。さらに、著者のフィールドであるアフリカの近代教育史に筆は進み、伝統社会と近代学校教育・公教育がいかに断絶しているかを示しながらも、学校そのものが「外生的」である中で、伝統社会に根ざした学校が社会的に意味のある形で存在することができるのか、アフリカ的な教育とは何なのか、を問っている。

第三章では、実際に途上国での学校教育がどのように実践され、どのような課題があるかについて、やはり著者が豊富な経験と情報を有するアフリカを題材に、説得力のある議論が展開されている。私が、最も傍線を引きながら読んだのも、この章であった。例えば、エチオピアのフィールドワークで、著者は住民の教育観が1年で「投資」から「人権」に変貌していることに気付く。そして、その年に行われた選挙がその変容に大きく影響していることに思い当たる。しかし、実際の教育は、すし詰め級の学級で、速成された教師によって、教科書や教具の乏しい中で行われ、その質は大変に低い状況である。また、無償化といえども、学校教育の拡大のためには、様々な負担が地

域社会や親に降りかかってくる。つまり、政治が介入して教育に対する意識が変わっても、住民が教育に本当に求めている成果、収入の増加や生活の改善は、十分に達成されていない、と著者は述べている。

ガーナでは、中等教育段階の様々なレベルの学校を事例に、学校間格差や費用・公平性を論じている。その底辺にあるコミュニティ・スクールは、生徒の親の経済力や教育水準が低く、社会階層を再生産するような状況にあり、しかもきちんとした公的投資もされずに教育の質は著しく低い。さらに、保護者・生徒が負担するコストも他のタイプの中高等学校に比べて安くない。そして、そのような状況を客観的に分析したうえで、著者は次のように嘆息する。「さまざまな困難にもかかわらず学校を続けようとするコミュニティ・スクールの生徒と話していると、私は、自分はいたいここで何をしているのだろうか、と思わずにはいられなかった。日本の政府にお金を出してもらって博士号までとった私が、自分ではしたことのないような苦勞をしつつ、学校に行くことここまで強い思いをもっている人々の、決して明るくない展望を知って、そのままにしているのだろうか」と。学術的な観察・考察とともに、こうし

た著者の実感が記されていることが、新書版で出版された本書の魅力になっているように思う。

終章で、著者は「途上国での教育実践や課題が、日本の教育と何らかの類似点や関連性があるのかどうか」について、意欲的な論考を行っている。この章のテーマは、小泉政権の「三位一体の改革」や塾、愛知県のニューカマーの教育にまで及び、これを途上国教育開発研究の蓄積から切り返すというような、ユニークな知的作業となっている。

さて、本書は初期の目的である「なぜ国際協力をするのか」「何のための教育なのか」について、最終的に解答を提示しているであろうか。著者自身が、この本のことを、上記の問いに対する「自問自答を、公然と書いてしまった代物」と若干自嘲的に表現しているとおり、この本に、明確な解答は提示されていない。いや、もし「明確な解答」など提示されたら、それは胡散臭いものになっていただろう。むしろ、気鋭の教育開発研究者である著者が、国際協力や教育に関して、真摯に、誠実に、懸命に「自問自答」し、努力している姿が、この本を通じて目に浮かび、私は大いに啓発され、感動すら覚えた。その意味で、教育分野に限らず、開発研究を志す学生諸氏に、本書をぜひ読んでいただきたい。